

説教「何事にも時がある」

(コヘレトの言葉 3章 1-15節 マタイによる福音書 20章 1-16節)

2021年9月26日主日礼拝

日本基督教団 仙川教会

大串 肇牧師

わたしたちの人生には良いことも悪いことも突然降りかかってくる時があります。良いことだけならば、大歓迎ですが、そううまくはいきません。一生懸命努力すればだれでも成功するならば、苦労は要らないです。危ない橋はなるべく渡らず、危険は避けてても事故にあったり、急な病に罹ったりします。何でも準備万端に備えて臨んでも、計画通りにいかないのが人生です。この人生をうまく生き抜く方法はないのでしょうか。人生の意義を熱心に追求した人物が旧約聖書にはおりました。それはコヘレトと呼ばれた人物です。彼はダビデの息子であり王であったと自分で言うのです。しかし、もしそれが本当でしたらソロモンのはずです。しかし、絶対にありえません。この書は、アラム語やパルシャ語が用いられたり、ギリシア哲学の影響を強く受けたりしてはいないか、つまりこの書が成立したのはずいぶん新しい時代に入ってからだと考えられています。ペルシャ時代よりも新しいヘレニズム初期時代、紀元前3世紀半ば、あるいは後期に書かれたと一般的には考えられています。

著者自身は自分のことをコヘレトと呼んでいます。これは集会や会堂の指導者という職務の名です。個人名ともなったと言われています。かつては伝道の書と言われていました。しかし彼は伝道者ではなく、賢者でした。彼は「天の下に起こることをすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べた」(コヘ1:13)人物だったと述べています。この無名の賢者の発言は非常に重要で、非常に興味深いです。しかしながら、驚くべきことにこの人生の意味を追求した賢者は同じ箇所でもこう述べています。「神はつらいことを人の子らの務めとなさったものだ」。なぜ、人の意味の追求は労苦なのでしょう。というのは、「太陽の下、新しいものは何ひとつない」(1:9)からだと言います。何をやっても変わらない。いろいろ考えても努力しても無駄なのです。非常に悲観的です。ニヒリストのような感じがします。

そのコヘレトによれば、「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある」というのです(コヘ3:1)。2-8節まで「～の時、～の時」という文言が続きます。各節に4つずつ2組の対句(反対命題)がきれいに並んで記されています。ですから、4(句)×7(節)=28(句)14組の対句です。

数字の4は東西南北の方位、世界や宇宙を表す数字であり、7は完全数です。つまり、生きることの全体がこの28句によって漏れなく言い表されいることがわかります。

最初の対句「生まれる時、死ぬ時」は個々人の運命にかかわることです。誕生と死。いずれも、それがいつ来るのか、把握し、制御出来る人はいません。また、「泣く時」と「笑う時」(4節)や、「黙する時」、「語る時」(7節)のように我々の日常生活のいろいろな人生の局面、悲しみや喜びの時があげられています。他方、「戦いの時」、「平和の時」(8節)等、個々人の生活や態度ではなく、国や社会全体が直面する局面もあります。我々の人生は個々人のものですが、社会的でもあります。個人にせよ、集団にせよ、いずれにせよ、「人が労苦してみたところで何になろう」(9節)。これがコヘレトの結論です。ずいぶん冷めた感覚ですが、現実的でもあります。努力したって報われないこともあるのも当然です。悪い時であるならばしょうがありません。時があるのだから、くよくよしても始まらない。コヘレトである「わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた」と言うのです。それは「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる」(3:10-11)。まず節の前半ですが、あらゆるものを神は創造されたというのは、創世記1章の天地創造の物語を思い起こします。「時になっっている」というのですが、原文ですと「美しい」(beautiful)という言葉です。神が天地をお創りになって「良しとされた」と、言葉は違いますが、同じの内容を言っています。いい時も悪い時も、誕生も死の時も、実はすべて天地をお創りになられた神のなさる御業なのです。この世界は(悪いように見えても)「美しい」はずなのです、神の御支配の中にあるからです。コヘレトは現実主義だけども、悲観主義者でもニヒリストでもありません。

また、後半は「永遠を思う心を人に与えられる」でした(3:11)。「永遠」という言葉は抽象的な概念です。この語は終わりのない時間の継続を指しています。「心」とはここでは感情的な思いや憧れではなく、理性を示しています。するとこういう意味になります。過去から未来にわたってわたしたちは自分の生を理解しようと求めるわけです。これ自体は悪くはないのですが、コヘレトはそれは「「労苦」にすぎません。というのは、「神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは」出来ないからです。こうして明らかになったのは、人の知識や計画には限界があるということです。ではどうしたらいいのか。その問いに答える前に、結びの14節と15節をご覧ください。こう書いています。

「すべて神の業は永遠に不変」であり、「今あることは既にあったこと／これからあることも既にあったこと」です。すなわち、過去も現在も、そして未来もいろいろな局面はあっても、神のなさる業は変わらないのです。つまり、

我々が「失ってしまったこと」あるいは失敗して「過ぎ去ってしまった」過去の事柄も神は尋ね求めてくださるのです。いろいろな変化があるように見える。しかし実はすべては神の御業であり、神は不変なのです。ですから、「神は人間が神を畏れ敬うように定められた」のです。つまり、我々はどこかで理解し、先のことをすべて先読みし、不安になることを停止しよう。そして神に信頼して委ねればいいのです。それが信仰です。

人生は獲得するものばかりではなくて、神から分け与えられたものにすぎません。それを享受すること、味わうことこそ、恵みです。そこでコヘレトの結論はこうです、「人間にとって最も幸福なのは／喜び楽しんで一生を送ること」、「飲み」「食い」「労苦によって満足すること、日常の生活をふつうに営むことなのです。但し、神を畏れ敬うこと、信仰こそ、神の与えて下さる人生で最上の「賜物」です。まさに神への信仰をもって「喜び楽しんで一生を送ること」、これに勝る人生はないのではないのでしょうか。

マタイ福音書によれば、イエス・キリストは最初に来た者にも、一日の最後に来た我々にも、一日中働いたのと同等の1デナリオンを与えて下さるといふのでいうのです。その一デナリオンとは、我々が努力し獲得した、労働の対価ではありません。その対価にまったく見合わないような怠惰な我々を神は憐み、途方もない恵みと賜物をお与え下さったのです。それこそ、イエス・キリストがご自分の命を捧げて下さり、十字架と復活によって、我々に永遠の生命を約束されたのです。あらゆる思い煩いから解放され、イエス・キリストによって与えられた神の愛を信じて生きる喜びを分かち合う。そういう信仰の道へご一緒に歩んでまいりましょう。お祈り致しましょう。